

概要

○大山果実部は、生産者77名（内、新甘泉生産者56名、王秋生産者42名）、梨栽培面積36haの梨中心の生産部で、近年、「二十世紀系統」から収益性の高い赤ナシ「新甘泉」「王秋」に切り替える生産者が多くなっている。しかし、「新甘泉」の黒星病、「王秋」のコルク状障害（格外）が原因で出荷量が伸び悩んでいる。○そこで、大山普及支所が中心となり、大山果実部の指導部と連携し、「新甘泉」「王秋」の全生産者の栽培管理、果実品質を集計し、問題点をデータとして見える化し、指導会、巡回で黒星病、コルク状障害対策を指導し、生産に問題のある生産者のレベルアップに繋げ、生産部全体として「新甘泉」「王秋」の売り上げが向上し、各生産者は、「梨で儲かる」と実感されるようになった。

具体的な成果

（1）「新甘泉」の生産安定

ア 黒星病対策

R5年に黒星病の発生した園や指導員・新規就農者などの23園について、春先から現地巡回を行って黒星病の発生状況と要因を調査した。調査結果について一覧表を作成し、発生要因や対策の検討に活用した。この黒星病調査一覧表を基に、果実部指導員で情報共有し、指導部情報や摘果指導会で注意喚起を行った。9月「黒星病勉強会」、2月「防除暦説明会」を実施して黒星病の発生要因と今後の対策について指導を行った。防除指導を行った結果、適期防除が行われ、黒星病の被害率10%以上の生産者数が激減した（R5:14園→R6:1園）。

イ カメムシ類対策

R6年はカメムシ類の被害が多発することを予測して、生産者に追加防除を4回実施するよう「緊急指導部情報」を配布し、防除を強化する指導を行った。さらに全生産者のカメムシ被害状況、加害時期、防除実績を調査して集計した。その結果を指導部で共有し、全生産者に対して「防除暦検討会」でカメムシ類防除対策の指導を行った。追加防除を行った生産者は、被害を最少に抑えることができた。全生産者56園を調査した結果、被害率20～30%が10園、50%以上が4園であった。

（2）「王秋」の生産安定

ア コルク状障害対策

王秋生産者42戸について「樹体、土壌などの栽培条件の違いとコルク状障害発生程度について」調査した。この調査を基に、「コルク状障害対策研修会」を開催し、生産者に発生要因と対策について指導を行った。R6年も夏季干ばつの影響でコルク状障害が発生し易い環境であったが、コルク状対策（土壌改良、早期摘果、新梢管理、かん水）を実施する生産者が5名増加（20名→25名）し、全体ではコルク状障害の被害程度は軽度に収まった。

普及指導員の活動

令和5年4月

・大山果実部の指導部と連携

令和5年4月

・「新甘泉」「王秋」の全生産者の栽培管理、果実品質を集計

～令和6年12月

・問題点をデータとして見える化

・指導会、巡回で黒星病、コルク状障害対策を指導

普及指導員だからできたこと

・果実部として一番問題となっている課題について、生産現場と一緒に調査・データ化し「見える化」する事により、生産者の意識が向上し、課題解決に繋がったと思う。今後も生産者が理解し易いように工夫して調査等の活動を行っていききたい。

「新甘泉」「王秋」の生産安定

活動期間：令和5年度～（継続中）

1. 取組の背景

大山果実部は、「二十世紀系統」から収益性の高い赤ナシ「新甘泉」「王秋」に切り替える生産者が多くなっているが、「新甘泉」の黒星病、「王秋」のコルク状障害（格外）が原因で出荷量が伸び悩んでいる。

「新甘泉」は、特にR5年のような開花の早い年に春先から低温降雨が続く場合、黒星病が多発し易い気象条件となり4月から黒星病が多発して5月～6月になっても感染が収まらず、多発園では大幅な減収となった。このため、産地では黒星病防除対策を徹底し、安定した生産ができるよう望んでいる。

「王秋」は高収量・高収益品種であるが、コルク状障害の発生が欠点である。R5年は、夏場の高温乾燥が原因と思われるコルク状障害が多発した。コルク状障害発生程度と樹体の関係について調査に基づいた対策・指導を行って生産安定を図る必要がある。

2. 活動内容（詳細）

（1） 「新甘泉」の生産安定に向けた活動

ア 黒星病対策

R5年に黒星病の発生した園や指導員・新規就農者などの23園について、春先から現地巡回を行って黒星病の発生状況と要因を調査した。調査結果について一覧表を作成し、発生要因や対策の検討に活用した。この黒星病調査一覧表を基に、果実部指導員で情報共有し、指導部情報や摘果指導会で注意喚起を行った。9月「黒星病勉強会」、2月「防除暦説明会」を実施して黒星病の発生要因と今後の対策について指導を行った。

イ カメムシ類対策

R6年はカメムシ類の被害が多発することを予測して、生産者に追加防除を4回実施するよう「緊急指導部情報」を配布し、防除を強化する指導を行った。さらに全生産者のカメムシ被害状況、加害時期、防除実績を調査して集計した。その結果を指導部で共有し、全生産者に対して「防除暦検討会」でカメムシ類防除対策の指導を行った。

（2） 「王秋」の生産安定に向けた活動

ア 「王秋」コルク状障害対策

王秋生産者42戸について「樹体、土壌などの栽培条件の違いとコルク状障害発生程度について」調査した。この調査を基に、「コルク状障害対策研修会」を開催し、生産者に発生要因と対策について指導を行った。

3. 具体的な成果（詳細）

(1) 「新甘泉」の生産安定

ア 黒星病対策

・黒星病の主な発生要因は、「落葉処理・秋防除が不十分、間伐が未実施で側枝が重なったため薬剤が掛かりにくい、薬剤散布量が少ない、りんぼう脱落直前防除の遅れ、適期防除ができていない（開花始め、落花期、幼果期）」であった。

・個別巡回による防除指導を行った結果、適期防除が行われ、黒星病の被害率 10%以上の生産者数が激減した(R5:14 園→R6:1 園)。

イ カメムシ類対策

・追加防除を行った生産者は、被害を最少に抑えることができた。全生産者 56 園を調査した結果、被害率 20~30%が 10 園、50%以上が 4 園であった。

・R5 年は黒星病、R6 年はカメムシ類が多発して栽培環境は厳しい状況であったが、指導部と協力して細やかな防除指導を行った結果、大幅な減収を免れることができた。

(2) 「王秋」の生産安定

ア 「王秋」コルク状障害対策

・樹体調査を行った結果、激発園・多発園は「徒長枝の発生が多く、土壌が硬く、細根の発生も少なく、土壌改良も行っていない」状態であった。小発園は「樹勢が中庸で徒長枝の発生が少ない園で、細い側枝に着果させている」状態であった。

・R6 年も夏季干ばつの影響でコルク状障害が発生し易い環境であったが、コルク状対策（土壌改良、早期摘果、新梢管理、かん水）を実施する生産者が 5 名増加（20 名⇒25 名）し、全体ではコルク状障害の被害程度は軽度に収まった。

4. 農家等からの評価・コメント（大山町 A 氏）

大山果実部として一番問題となっている課題について、生産現場と一緒にになり調査・データ化し「見える化」した事により、生産者の意識が向上し、課題解決に繋がったと思う。

5. 普及指導員のコメント（大山農業改良普及所・普及主幹・杉嶋 至）

今後も生産者が理解し易いように工夫して調査等の活動を行っていききたい。

6. 現状・今後の展開等

大山果実部では、この収益性の高い「新甘泉」「王秋」が安定して生産できる目途が立ったことにより、生産者から「梨は儲かる。」という声が多く上がるようになってきた。今後は、今後は、「新甘泉」「王秋」など儲かる梨栽培を PR し、新規就農者など新たな担い手を確保していきたい。